

古書のたのしみ（令和七年十月）

土屋 博

一「増補点註國史略 卷之二」巖垣松苗著、巖垣杉苗註釋

（六合館、明治十年刊、六八丁）

古書價格五百圓也。巖垣松苗（一七七四年生れ、一八四九年歿。江戸後期の儒學者。）の「國史略」（文政十年（一八二七年）刊）は、寺子屋の歴史教科書として名高し。註釋者の杉苗は、松苗の孫なり。

卷之一は、神代より持統天皇までの時代を収録す。



二「國史紀要 卷上」岡本監輔編

（文部省檢定済小學校教科用書、明治二十年訂正再版、本文三九丁+附録）

古書價格五百圓也。初版は明治十八年刊。例言に曰く、「此書は小學教則綱領に遵ひ以て小學史料の讀本に充つ。故に事の大要を記し以て治亂の原委を明にし讀者をして靄然忠愛の心を振起せしむ。」と。

卷上は、第八十代高倉天皇までの時代を収録す。

三「必ず踏むべき 人の道」御歌所寄人・文學士武島羽衣監修

（帝國講學會、大正十五年二十五版、定價金四圓、八二四頁）

古書價格千圓也。初版は大正十二年。武島羽衣は、一八七二年生れ、一九六七年歿。東京音楽學校教授。「美しき天然」を作詞す。「空にさへづる鳥の聲、峯より落つる瀧の音」云々。

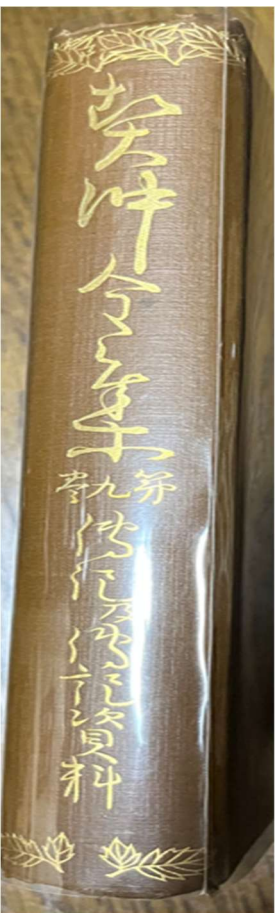
目次は、羽衣による「人の道十話」に續き、第一編自己に對する人の道（品性、立志、忍耐、勤儉、修業）、第二編家族に對する人の道（孝順、友愛、和貞）、第三編社會に對する人の道

(處世、信義、廉潔、博愛、公益)、第四編國家に對する人の道(忠節、義勇、言行)。それぞれの徳目につき、著名知識人(大町桂月、新渡戸稻造、三宅雪嶺、福澤諭吉、貝原益軒、乃木希典、芳賀矢一、高山樗牛、坪内逍遙ら)の名文、綺羅星の如くに並び、アンソロジーとして壯觀の極みなり。

四「契沖全集第九卷 傳記及傳記資料」上田萬年監修、新村出・佐佐木信綱・橋本進吉・武田祐吉・久松潛一共編

(朝日新聞社、昭和二年刊、正價金七圓、六一三頁)

古書價格三百圓也。本卷の「契沖傳」は久松潛一(一八九四年生れ、一九七六年歿。東京大學名譽教授。)の長篇述作にして、契沖を研究せんとする者にとりては、必讀書といふべし。久松潛一、「結論」に曰く、「義公と契沖が相會した事は、近世の日本學の發端であつた。義公の薰陶した水戸學は愈々純史學となり、契沖の端を開いた古學は國學となり、終に古道といふ宗教運動となつて、何れも日本を中心とする運動を起したのである。この水戸學と國學こそ明治維新の端を開いたものではなかつたか」と。



五「一日一訓」新渡戸稻造著

(鐵道青年會出版部、昭和七年刊、非賣品)

古書價格三百三十拾圓也。名著「一日一言」と同一内容なり。

六「新訂 現代文解釋法 全」塚本哲三著

(有朋堂、昭和九年五十二版、正價金一圓八拾錢、本文四八〇頁十附錄要語篇八一頁)

古書價格三百三十拾圓也。初版は大正十四年。現代文とはいふも、解釋篇目次は、姉崎嘲風、阿部次郎、上田敏、上田萬年、高山樗牛、坪内逍遙、夏目漱石、西田幾多郎、芳賀矢一、森鷗外、大町桂月、幸田露伴、島崎藤村、徳富蘇峰・蘆花、樋口一葉、芥川龍之介、尾崎紅葉ら。

七「吉田松陰集」雜賀博愛監修

（興文社、昭和十八年刊、定價貳圓五拾錢＋特別行爲稅相當額六錢、三〇五頁）

古書價格五百圓也。勤王志士叢書の一冊。監修者雜賀博愛（一八九〇年生れ、一九四六年歿。九州日報、日本及日本人記者。「大西郷傳」の著者）の「吉田松陰先生」なる卷頭の論文は秀逸。曰く、「先生の進むところ、秋風浙瀝（せきれき。哀れにて寂しきさま。）たるの感あり、その志を伸ぶるに當つては木枝裂け、身を擲つに當つては石も哭するの趣あり。」と。目次は、講孟劄記抄、武教全書講義抄、讀綱鑑錄、留魂錄、時務策建言、幽室文稿及幽囚錄抄、松陰先生遺文雜抄、松陰先生書簡抄、松陰先生詩抄、松陰先生歌句集、松陰先生略年譜。松陰入門書として到れり盡せりの一冊と覺ゆ。

八「近世漢學者・詩人の遺墨」仁枝忠撰

（和泉書院、昭和六十三年刊、定價二千圓、一七九頁）

古書價格九百圓也。林羅山「江上秋開いて顔色鮮やかなり」、荻生徂來「谿山雪月兩つながら佳いかな」、廣瀬淡窓「書を讀んでドウ（門構へに市、騷がしきこと。）を道ふを休めよ」、佐藤一齋「慎獨の工夫は、當に身の稠人廣坐の中に在るが如く一般なるべし」、山陽「日出づる處、日地に墜つ」など。

（令和七年十一月十七日受附）